

小学校国語教材「スーホの白い馬」の主題についての再検討

A Reconsideration of the Main Theme of “Suho no Shiroi-Uma,” a Japanese Reading Material for Elementary School Students

宮川 久美
MIYAGAWA Hisami

この作品は、従来、スーホの白馬に対する思いの深まり、純粋な愛、「変わらぬ絆」を描いていると解釈されてきた。しかし本稿は、スーホの二度の決断をとおして、彼の白馬に対する愛の変容を描いていると考えた。一度目は、白馬にまたがって殿様主催の競馬に出たこと。それは、白馬と他の馬とを比べることであり、自慢の白馬をみんなに見せびらかすことである。その結果白馬を失うことになる。二度目の決断は、スーホの元に瀕死の重傷を負いながら帰ってきて翌日死んだ白馬が夢に現れ、自分の体で楽器を作るようにと言ったとき。白馬の、身を以てスーホを慰めようとする愛に呼応してスーホの愛は「ぼくの白馬」という「所有の愛」を超え、対等の愛、個の尊厳を認めた手放す愛へと昇華する。この結果、楽器「馬頭琴」はひとりスーホを慰めるだけでなく、聞く人の心をゆりうごかし、広いモンゴルの草原中に、ひろまって、多くの羊飼いたちの一日の疲れを忘れさせるものになったのである。

キーワード：小学校，国語教科書，馬頭琴

Key Words : Primary school, Japanese Textbook, Matouqin, Mongolian bowed stringed instrument

1. はじめに

『こくご二年下 赤とんぼ』¹⁾ (光村図書, 平成 11 年文部省検定済) に収められている「スーホの白い馬」は、モンゴル民話「馬頭琴」²⁾ を大塚勇三氏が再話した『スーホのしろいうま』³⁾ (昭和 36 年, 『月刊絵本こどものとも』) に大塚氏自身が加筆し、再話し直した『スーホの白い馬』⁴⁾ (昭和 42 年, 福音館書店) を原典としている。教材とするとあたり大塚勇三氏が全文にわたって表現、用語に至るまで再度克明に検討を加え、完璧を期したという⁵⁾。光村図書出版の国語教科書には昭和 40 年度版から現在に至るまで採用され続けている。本稿では、教科書版の再話と福音館書店版との再話を比較しつつ、改めてその主題を考察したい。

2. 教科書版と福音館書店版の比較

はじめに、教科書¹⁾ のとおり引用し、福音館書店版⁴⁾ (以下「原作」という) からの変更点に傍線を付して、原作の文章を()で記した。漢字については、小学校二年生の学習漢字に従って、仮名から漢字に、漢字から仮名へ変更されているが省略する。また、適宜、読点が付されている。

中国の北の方、モンゴルには、広い草原がひろがり、そこにすむ人たちは、むかしから、ひつじや、牛や、馬などをかって、くらしていました。

このモンゴルに、馬頭琴という、がっきがあります。がっきのいちばん上が、馬の頭のかたちをしているので、馬頭琴というのです。いったい(けれど)、どうして、(ナシ) こういうがっきができたのでしょうか。それにはこんな話があるのです。

むかし、モンゴルの草原に、スーホという、まずしいひつじかいの少年がいました。

スーホは、ととったおばあさんと、ふたりきりで、(ナシ) くらしていました。スー

ホは、おとなにまけないくらい、よくはたらきました。毎朝、早く起きると、スーホは、おばあさんを助けて、ごはんのしたくをします。それから二十頭あまりのひつじをおって、ひろいひろい草原に出ていきました。

スーホは、とても歌がうまく、ほかのひつじかいたちにたのまれて、よく、歌をうたいました。スーホのうつくしい声は、草原をこえ、遠くまでひびいていくのでした。

ある日のことでした、日は、もう遠い山のむこうにすぎみ、あたりは、ぐんぐん暗くなってくるのに、スーホが帰ってきません。

おばあさんは心配でたまらなくなりました。近くに住むひつじかいたちも、どうしたのだろうと、さわざはじめました。

みんなが、心配でたまらなくなったころ、スーホが、なにか白いものをだきかかえて、はしってきました。みんなが、そばにかけよってみると、それは生まれたばかりの、小さな白い馬でした。

スーホは、うれしそうにわらいながら、みんなにわけを話しました。「帰るとちゅうで、子馬を見つけたんだ。これが、地面にたおれてもがいていたんだよ。あたりを見ても、持ち主らしい人もいないし、おかあさん馬も見えない。ほうっておいたら夜になって、おおかみにくわれてしまうかもしれない。それでつれてきたんだよ」

日は、一日、一日と、過ぎていきました。スーホが心をこめてせわしたおかげで、子馬はりっぱにそだちました。からだは、雪のように白く、きりっとひきしまつて、だれでも、おもわず、みとれるほどでした。(スーホは、この馬が、かわいくてたまりませんでした。)

あるばんのこと、ねむっていたスーホは、はっとめをさましました。けたたましい馬のなき声と、ひつじのさわぎが聞こえます。スーホは、はねおきると外にとび出し、ひつじのかこいのそばにかけつけました。

みると大きなおおかみが、ひつじにとびかかろうとしています。そしてわかい (小さな) 白馬が、おおかみの前にたちふさがって、ひっしにふせいでいました。

スーホは、おおかみをおいはらって、白馬のそばにかけよりました。白馬は、からだじゅう、あせでびっしょりぬれていました。きっと (ナシ) ずいぶん長い間、おおかみとたたかっていたのでしょう。

スーホは、あせだらけになった白馬の体をなでながら、きょうだいにいうように話しかけました。

「よくやってくれたね、白馬。ほんとうにありがとう。これから先、どんなときでも、ぼくはおまえといっしょだよ。 (ナシ)」

月日はとぶように過ぎていきました。

ある年の春、草原いったいに、しらせがつたわってきました。このあたりを、おさめているとのさまが、町でけいばの大会を、ひらくというのです。そして一とうになった者は、とのさまのむすめと、けっこんさせるというのでした。

このしらせを聞くと、なかまのひつじかいたちは、スーホにすすめました。「ぜひ、白馬に乗って、けいばにでてごらん」

そこでスーホは、大すきな白馬にまたがり、ひろびろとした草原をこえて、けいばのひらかれる町へと、むかいました。

けいばの場所には、見物の人たちがおおぜいあつまっていました。台の上には、とのさまが、どっかりとこしをおろしていました。

けいばが、はじまりました。国じゅうから集まった、たくましいわかものたちは、いっせいにかわのむちをふりました。

馬は、とぶようにかけます。でも先頭を走っていくのは…白馬です。

スーホの乗った、白馬です。「白い馬が一とうだぞ。白い馬の乗り手をつれてまいれ!」

とのさまは、さげびました。

ところがつれてきたわかものを見ると、まずしいみなりの（びんぼうな）ひつじかいではありませんか。そこで、とのさまは、むすめのむこにするという（ナシ）やくそくなどは、しらんぷりしていいました。

「おまえにぎんかを三まいくれてやる。その白い馬をここにおいて、さっさと帰れ！」
スーホは、かっとなって、むちゅうでいいかえしました。

「わたしはけいばにきたのです。馬を売りにきたのではありません」
「なんだと、ただの（いやしい）ひつじかいが（のくせに）、このわしにさからうのか。ものども、こいつをうちのめせ！」

とのさまがどなりたてると、けらいたちがいっせいに、スーホにとびかかりました。スーホは、おおぜいになぐられ、けとばされて、気をうしなってしまうました。

とのさまは、白馬をとりあげると、けらいたちをひきつれて（ナシ）、おおいばりで帰って行きました。

スーホは、友だちに助けられて、やっとうちまで帰りました。

スーホのからだは、きずや、あざだらけでした。おばあさんが、つきっきりで手当てをしてくれました。おかげで、なん日かたつと、きずはなおってきました。それでも、白馬をとられたかなしみは、どうしてもきえません。白馬はどうしているだろうと、スーホはそればかり考えていました。白馬はどうなったのでしょうか。

すばらしい馬を手に入れたとのさまは、まったくいいきもちでした。もう白馬をみんなにみせびらかしたくてたまりません。

そこである日のこと、とのさまは、おきやくをたくさんよんで、さかもりをしました。そのさいちゅうに、とのさまは、白馬に乗って、みんなにみせてやることにしました。

けらいたちが、白馬を引いてきました。とのさまは馬にまたがりました。

そのときです。白馬は、おそろしいいきおいではねあがりました。とのさまは地面に、ころげおちました。白馬はとのさまの手から、たづなをふりはなすと、さわぎたてるみんなのあいだをぬけて、風のようにかけだしました。

とのさまは、起きあがろうともがきながら、大声でどなりちりました。

「早く、あいつをつかまえろ！つかまらないなら、弓でいころしてしまえ！」

家来たちは、いっせいにおいかけてました。けれども、白馬にはとてもおいつけません。

（ナシ）家来たちは、弓をひきしぼり、いっせいに、矢をはなちました。矢はうなりを立ててとびました。白馬のせにはつぎつぎに、矢がささりました。それでも白馬は、走りつづけました。

そのばんのことです。スーホがねようとしていたとき、ふいに、外のほうで音がしました。

「だれだ。」

と、聞いてもへんじはなく、カタカタ、カタカタと、もの音がつづいています。ようすを見に出ていったおばあさんが、さげび声をあげました。

「白馬だよ。うちの白馬だよ。」

スーホは、はねおきて、かけていきました。見ると、本当に、白馬はそこにいました。けれど、その体には、矢が何本もつきささり、あせがたきのように流れおちています。白馬は、ひどいきずをうけながら、走って、走って、走りつづけて、大すきなスーホのところへ、帰ってきたのです。

スーホは、はをくいしぼりながら、（つて、つらいのをこらえながら、）馬にささっている矢を、ぬきました。きず口からは、ちがふき出しました。

「白馬、ぼくの白馬。死なないでくれ！」

でも白馬は、弱りはてていました。いきは、だんだん細くなり、目の光りもきえていきました。

そして、（ナシ）つぎの日、白馬は死んでしまいました。

かなしきとくやしきで、スーホはいくばんも、ねむれませんでした。

でもやっとあるばん、とろとろとねむりこんだとき、スーホは、白馬のゆめを見ました。スーホが、なでてやると、白馬は体をすりよせました。そして、やさしくスーホに、話しかけました。

「そんなに、かなしまないでください。それより、わたしのほねや、かわや、すじや、毛を使って、がっきを作ってください。そうすれば、わたしはいつまでも、あなたのそばにいられますから。(あなたを、なぐさめてあげられます。)」

スーホは、ゆめからさめるとすぐ、そのがっきを作りはじめました。ゆめで白馬が教えてくれたとおりに、ほねや、かわや、すじや、毛を、むちゅうで組み立てていきました。

がっきは、できあがりしました。これが、馬頭琴です。

スーホは、どこへ行くときも、この馬頭琴をもっていきました。それをひくたびに、スーホは、白馬をころされたくやしきや、白馬に乗って、草原をかけ回った楽しさを思い出しました。そしてスーホは、じぶんのすぐわきに、白馬がいるような気がしました。そんなとき、がっきの音は、ますますうつくしくひびき、聞く人の心をゆりうごかすのでした。

やがてスーホの作りだした馬頭琴は、広いモンゴルの草原中に、ひろまりました。そしてひつじかいたちは、ゆうがたになると、より集まって、そのうつくしい音に耳をすまし、一日のつかれをわすれるのでした。

原作と教科書との変更点で最も大きいところは、殿様から見たスーホの描写で、「びんぼうな」→「まずしいみなりの」、「いやしいひつじかいのくせに」→「ただのひつじかいが」である。これは、教科書という性質上、身分差別を感じさせる言葉を避けたものである。また、原作「スーホは、この馬が、かわいくてたまりませんでした。」は削除。原作「スーホははをくいしばって、つらいのをこらえながら、」→「はをくいしばりながら、」。原作「そうすれば、わたしはいつまでも、あなたのそばにいられます。あなたを、なぐさめてあげられます。」→「そうすれば、わたしはいつまでも、あなたのそばにいられますから。」のように、原作の、スーホと白馬の心情を表す表現が教科書では削除されている。学習者に考えさせようという意図だろうと思われる。たとえば、原作の「スーホは、この馬が、かわいくてたまりませんでした。」とある表現は、スーホが白馬を「だきかかえて」帰ってきたところに引き続いて、スーホの白馬に対する心情を説明したものである。また、教科書では原作の「あなたを、なぐさめてあげられます。」という白馬の言葉が削除されているが、「そんなにかなしまないでください。」という言葉から、スーホを慰めてあげたいという白馬の心情は容易に推し量ることができる。この作品は、モンゴル民話を大塚勇三氏が再話したものであるが、再話した時点で、これは大塚勇三氏の作品である。作者大塚勇三氏が作品を通してなにものかを読者に伝えようとしているのである。教科書版への変更については大塚勇三氏自身が関わったということもあって、主題に影響のある変更はなかったと考えられる。

3. 作品の構造と主題

では、この作品を通じて作者は何を伝えたかったのだろうか。

これまでの解釈では、この物語の主題は「スーホと白い馬を結ぶ強い愛情のきずなは、王様のどんな権力にも屈することなく、死によってすらも断たれることがなかった。」⁶⁾とか、「たくましく心の優しいスーホと、愛情いっぱい育てられ、スーホの愛にこたえる白馬との、固い心の結びつき」⁷⁾とされる。また、ずるがしこく横柄な殿様と、愛と正義を体現するスーホとを対比的に描いているともいわれる⁸⁾。しかし、果たしてそうだろうか。本稿では、この作品が伝えたかったこと、すなわち主題について、スーホの生き方考え方を通じて再検討したい。

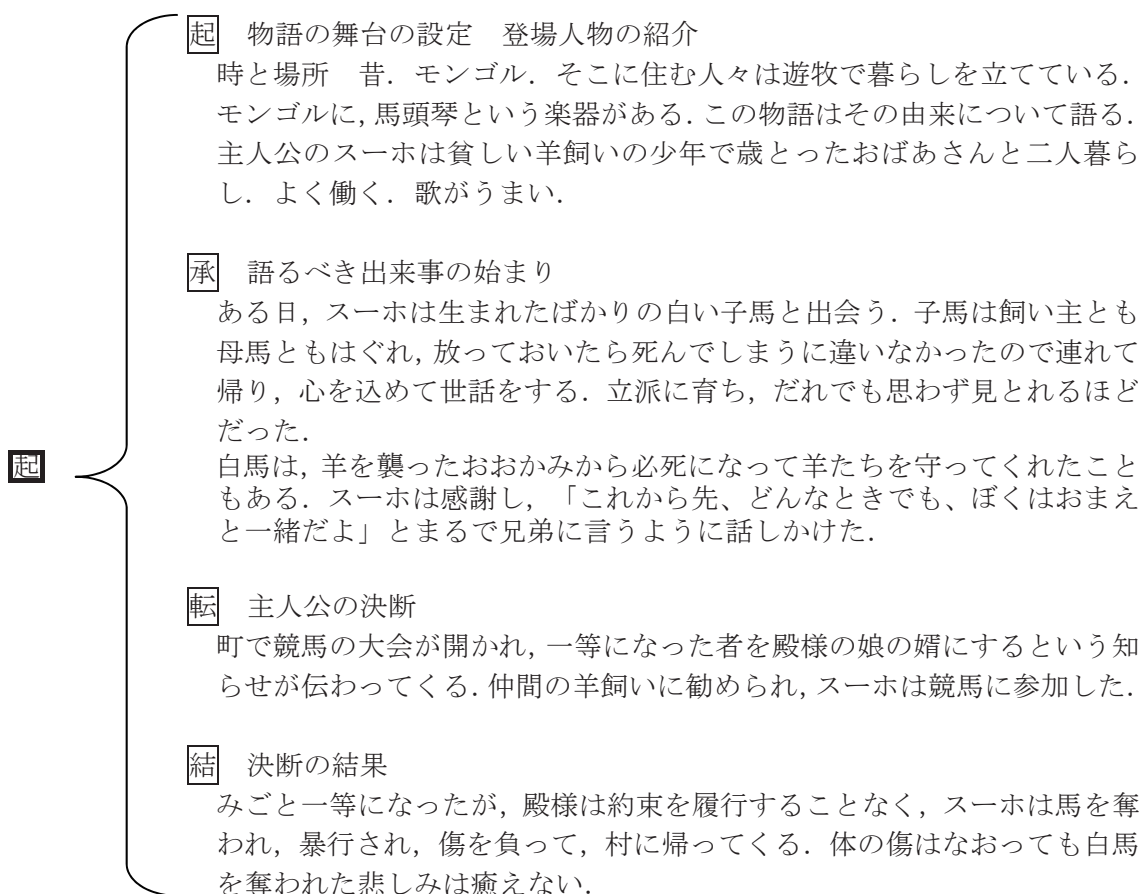
人生は、決断の連続である。大きな決断、小さな決断、無意識の決断、それらすべてに

結果が伴い、その結果は、責任を持って自分で引き受けなければならない。どのような決断をするか、それはつまり、その人の生き方、考え方である。そのような決断の連続がその人の生き方そのもの、人生そのものである。

物語は、ある人物がある状況下でどのような決断をしたか、その結果、どのような結果を引き受けることになったかを描くことによって、その生き方を通して作者の考えを述べるものである。この考えに従って、この作品においてスーホが決断したところを見ていきたい。

物語を起承転結の四段階に分けると、決断は転にあたる。それまでの登場人物の紹介や時と場所等、物語の舞台の設定が起である。そして、具体的に語りたい出来事の始まりを語るのが承である。決断の結果が、結である。

さて、この物語の中で、スーホはもっとも初めに、放置しておけば死ぬに違いない白馬と出会い、連れて帰るという決断をしている。これも人生の中では一つの決断だが、物語としては、白馬との出会い、すなわち、語りたい出来事の始まり、物語の導入にあたる。その後、二度、重大な決断をしている。それぞれが彼の人生にとって、この物語にとって重大な決断である。二度の決断において、一度目と二度目とはスーホの白馬に対する心情の質が全く異なっている。従ってその決断の結果も全く異なったものになっている。その構造を示すと次のようになる。



承 これまでの状況を**起**として、引き続き、起こった出来事を語る
 白馬は殿様の所から脱出して帰ってきてスーホと再会を果たすが、背中に矢を突き立てられており、翌日に死んでしまう。

転 主人公の決断
 スーホの夢に白馬が現れ、そんなに悲しまないでください、自分の骨や皮や筋や毛で楽器を作ってください、そうすればいつまでもあなたのそばにいられますから、という。ス

一ホは言われたとおり、白馬の遺体の骨や皮や筋や毛を使って楽器を作る。

結 決断の結果

こうして馬頭琴が出来る。これを弾くとスーホは白馬を殺されたくやしさを草原を駆け回ったときの楽しさを思い出した。自分のすぐわきに白馬がいるような気がした。楽器の音は、スーホだけでなく、聞く人すべての心を揺り動かし、羊飼いたちの一日の疲れを癒すのだった。

では、スーホの白馬への心情を段階を追って見ていきたい。

スーホが白馬と初めてであったとき、馬は、生まれたばかりで、飼い主とも母馬ともはぐれ、放っておいたら死んでしまうに違いなかった。スーホは抱きかかえて、走って帰り、心を込めて世話をする。スーホの保護なくして子馬は生きることができなかった。スーホのおかげで子馬は立派に育った。このようなスーホの白馬への愛情は、親の子どもに対するそれに似ている。立派に育った「スーホの白馬」は誰でも、思わず、見とれるほどだった。スーホにとっては人々の賞賛的である白馬がかわいくてたまらず、自慢でもあったであろう。我が子への愛は見返りを求めない無償の愛であるが、しかし、「我が子」という思いから免れること、すなわち「所有の愛」であることを免れることは親にとってはなかなかの試練である。スーホにとっても白馬は「ぼくの白馬」だった。

そんなある夜、狼が羊たちを襲うという事件が起こる。騒ぎに気づいたスーホが駆けつけると「わかい白馬が、おおかみの前にたちふさがって、ひっしにふせいでい」た。白馬はスーホのために必死に羊を守ろうとした。白馬にとってスーホは愛を注いで育ててくれた母親のような存在であり、スーホが大切に世話をしている羊はスーホの家にとってもっとも重要な財産である。羊を守ることはスーホを守ることだった。「スーホは、おおかみをおいはらって、白馬のそばにかけより」「あせだらけになった白馬の体をなでながら、『よくやってくれたね、白馬。ほんとうにありがとう。これから先、どんなときでも、ぼくはおまえといっしょだよ。』ときょうだいにいうように話しかけ」た。白馬は成長してスーホにとって兄弟のように頼もしい存在となった。親の愛も、幼い子供に対するのと、成長し頼もしくなった子供に対するのではおのずから変化が生じるだろう。

さらに月日がとぶように過ぎ、町で競馬の大会が開かれ、一等になった者を殿様の娘の婿にするという知らせが伝わってくる。仲間の羊飼いたちに勧められ、スーホは競馬に出かけていった。これが一度目の決断である。

スーホはなぜわざわざ町で開かれる競馬の大会に出かけていったのだろうか。作者はそれを明確に記述していない。それはスーホ自身が明確に意識していなかったということを表すのだろう。一等になった者を殿様の娘の婿にするという知らせが伝わってきて、スーホは仲間の羊飼いに勧められ、ふとその気になったのだが、殿様の娘の婿になりたかったのだろうか。『小学校国語 学習指導書 2 赤とんぼ』⁷⁾でも「ぜひ、白馬にのって、けい馬に出てごらん」という仲間の羊飼いの言葉について、「スーホの白馬がすばらしく、一等をとれるにちがいないと信じているからこそ言える言葉である。この機会を生かして、貧しく心優しいスーホに幸せになってほしいという、仲間たちの願いも読み取ることができる。」とする。「スーホは殿様の娘との結婚がかけられた競馬に、勇んで出て行く。若者らしい健康な野心の表現である。」⁹⁾とするものもある。確かに若い男が金と女と地位を手に入れたと思うのは健康といえ健康である。しかし、そうだとすれば、きっと一等になれるに違いない、誰よりも優れた白馬をいわば切り札として、勝負に勝って、金と地位と妻を得ようとしたことになる。「健康な野心」のために「愛する」者を切り札にしたのである。そこまで明確な意識はなかったのかもしれないが、潜在意識の中にもそれがなかったとするような根拠もない。または、スーホは一等になるだけで満足だった、殿様の娘の婿になることよりも、白馬がすばらしく立派であることをみんなに見せたかっただけだ

ったのかもしれない。しかし、それも厳密に言えば、自分のすばらしい持ち物を人に見せて誇りたかったのだということになる。そもそも「競馬」とは、「くらべうま」である。すなわち、どの馬が立派か、走るのが速いか、何頭もの馬を競わせて比べることである。これに参加する気になったということは、スーホにとって、白馬は他と比べることのできる相対的な存在であったということである。子に対する親の愛も、厳密に言えば、このような思い—「所有の愛」から完全に免れるのは難しいのではないか。かわいくてたまらない我が子、誰もが見とれるほど立派に育てた我が子、誰よりも優れていると思う自慢の我が子という思いから。

仲間の羊飼いに勧められ、ふとその気になったのだが、その決断をしたのは自分自身であって、他人に勧められたのであっても、無意識であって、その決断の結果は自分で引き受けなければならない。結果がどのようなものであろうともそれは人のせいではない。そして、結果はと言えば、暴行されたうえ、殿様に馬を奪われてしまうのである。「これから先、どんなときでも、ぼくはおまえといっしょだよ。」と言ったことが叶わなくなったのは、自らの決断の結果である。

殿様は悪い人だが、この物語は、悪い権力者が善良でかわいそうな、貧しい羊飼いの物を奪ったということと言おうとする物語ではない。スーホと対比的に描こうとしている登場人物でもない。人の所有物をうらやみ、取り上げようとする権力者や欲張り人間は常に存在する。むしろ、殿様とスーホは同質である。

すばらしい馬を手に入れたとのさまは、まったくいいきもちでした。もう白馬をみんなにみせびらかしたくてたまりません。そこである日のこと、とのさまは、おきやくをたくさんよんで、さかもりをしました。そのさいちゅうに、とのさまは、白馬に乗って、みんなにみせてやることにしました。

この心情は、スーホが競馬でいかに自分の白馬がすばしいか、みんなに見せたくて、わざわざ町まで出かけていった心情と同質である。もちろん、白馬はスーホが大好きであり、単にいいものを不正な手段で手に入れた殿様とは白馬との関係性において全く異なるが、「すばらしい馬」「僕の馬」をみんなに見せたいという点において、厳密には同質なのである。だからこそ、スーホは殿様のような人間に出会ってしまったのである。スーホが白馬を殿様に奪われたのは、殿様が悪い人だからではない。スーホが町で開かれる競馬に出かけていく決断をした結果である。「スーホのとのさまへの純な憤り」⁸⁾ などと言うのは、スーホは純粋な男であるという何の根拠もない美化した思い込みである。大切にしている自慢の白馬を奪われて憤るのは当然で、特にそれは純でも何でも無い。また、「彼は野心の挫折を悲しんだり、殿様の背信を怒ったりするより、白馬のことだけを心配する。スーホという若者の優れた人格を最も印象づけているところである。」⁹⁾ とするものもあるが、かわいくてたまらない我が子のような白馬を奪われたのである。一等賞を取ろうと思った野心が挫折したことを嘆いている場合ではない。特に優れた人格者などではなくてもそれが普通であろう。

しかし、物語はここからが肝心である。スーホは二度目の決断をする。それは、矢を射かけられて瀕死の重傷を負いながらスーホの元に帰ってきてその翌日死んだ白馬の遺体を切り刻んで楽器を作ろうという決断である。この場面を読むと、学生たちは、愛する者の遺体を切り刻むなんて自分ならとてもできないと口々に訴える。「ほねや、かわや、すじや、毛を、むちゅうで組み立てていきました」とさりと書かれているが、組み立てる前には、解体しなければならぬことに、よく考えれば思い至る。愛する者の遺体を切り刻むことには深い葛藤があったはずであるが、あまりにつらい場面であるので、作者は読者の年齢を考慮して葛藤を描かず、さりと通過したのであろう。「白馬の骨・皮・筋・毛を使って楽器を作るのはかわいそうだ、といった考えをもつ児童もいるかもしれないので、

注意したい。」⁷⁾と指導書にはある。さらりと書いてあっても気づく児童もいるのである。指導書は「白馬が自分の体を楽器に替えてスーホといつまでもいようとする心情は、主題につながる大切な部分であり、十分に読み深めさせたい。」⁷⁾とする。すなわち、白馬がおおかみから羊を守ってくれたとき、スーホが「どんなときでも、ぼくはおまえといっしょだよ」と言った、その言葉をキーワードとして、その後の白馬との愛情の絆が深まっていったことを読み取らせたいという。

たしかに、この言葉はこの作品において、重要な意味を持つ。しかし、最初のスーホの「いっしょだよ」と白馬の「いつまでもあなたのそばにいられますから」とはその質が全く異なる。

初めのスーホの言葉はごく安易なものである。「どんなときでも」「いっしょ」ということが、諸行無常のこの世にあっていかに実現困難であるか、よく考えれば恐ろしいほど明らかである。愛する者を失いたくない、別れたくない、と思えば思うほど避けようのない別れの時を思って恐れずにはいられない。しかし、このときスーホはそのような恐れにおののきながら「いっしょ」と言ったわけではない。たとえば、『100万回生きたねこ』¹⁰⁾において、ねこが「白いねこと いっしょに、いつまでも生きていたいと思いました」というときの「ねこ」の思いとは、切実さにおいて全く異なる。スーホは安易にいつまでも「いっしょ」にいられると思っていたのである。そのため、愛する白馬を切り札にして勝負に勝って金と地位と妻を手に入れようとした。その愚かな決断の結果、自ら白馬との早すぎる別れを招いてしまったのである。死んだ白馬が「そんなに、かなしまないでください。それより、わたしのほねや、かわや、すじや、毛を使って、がっきを作ってください。そうすれば、わたしはいつまでも、あなたのそばにいられますから。」と言うとき、それはスーホを悲しみから救い、慰めるため、文字通り、献身的な愛によってスーホのそばにいようというのである。スーホの願い通り「いつまでもいっしょにいる」ために、我が身を切り刻んで組み立てなさいというのである。スーホの最初の「どんなときでも、ぼくはおまえといっしょだよ」とは覚悟が違う。

「白馬、ぼくの白馬。死なないでくれ!」と嘆いたスーホのもとから白馬は手の届かないところに行ってしまった。そして文字通り身を以てスーホを慰めようとしている。この白馬の愛に呼応して、スーホの白馬に対する愛は変容したのである。すなわち、「ぼくの白馬」という思いを超えるのである。これを単なる思いの深まり、変わらぬ絆と読むのは正しくない。スーホの愛は明らかに質的に変わったのである。むしろ、終始変わっていないのは、白馬の方である。白馬は、いつも静かにスーホを愛し、見守ってきた。スーホが自分を切り札として競馬に出たときの白馬の心情については全く描かれていない。しかし、白馬は、それがスーホの喜びならば、それをそのまま自らの喜びとしたのであろう、その結果殿様に捕まっても、命がけでスーホのもとに帰り、たとえ死んでも自らの体を献げることによってスーホを慰めようとした。だからこそスーホは白馬の愛に呼応して変容を遂げ、白馬の言葉通り、遺体を切り刻むことができたのである。そして骨、皮、筋、毛を使って楽器を作り上げる。

こうしてできた馬頭琴をひくとき、「スーホは、じぶんのすぐわきに、白馬がいるような気がし」という。このありようは、初めの「どんなときでも」「いっしょ」とは質的に異なる。「ぼくの白馬」ではないからこそ、ひとりスーホを慰めるだけでなく、聞く人の心をゆりうごかし、広いモンゴルの草原中にひろまって、羊飼いたちの一日の疲れを忘れさせるものになったのである。白馬は「スーホの白馬」ではなくなり、多くの羊飼いたちを慰める存在になった。これがスーホの二度目の決断の結果である。

4. おわりに

この物語を読むとき、私は2012年6月、脳死状態になった六歳の少年の両親が臓器移植に同意し、次のようなコメントを発表されたことを思い出さずにはいられない。

「息子は、私たち家族が精いっぱい愛情を注いで育ててきました。元気な息子のわんぱくにふりまわされながらも、楽しい時間を家族みんなで過ごしてきました。本日、息子は私たちのもとから遠くへ飛び立って行きました。このことは私たちにとって大変悲しいことではありますが、大きな希望を残してくれました。息子が誰かのからだの一部となって、長く生きてくれるのではないかと。そして、このようなことを成しとげる息子を誇りに思っています。私たちのとった行動がみなさまに正しく理解され、息子のことを長く記憶にとどめていただけるなら幸いです。そして、どうか皆様、私たち家族が普段通りの生活を送れるよう、そっと見守っていただきたくお願い申し上げます。」¹¹⁾

愛する息子を私たち家族だけのものではなく、身を以て人の命を救うという偉大な事を成し遂げた人として、誇りに思うというのである。親にとって子は紛れもなく血を分けた「私の子」である。それを、「私の」ではない、一個の人間として、そのような偉大な事を成し遂げる人間として誇りに思う、という。ここに至るまでにどんなに深い葛藤があったかは察するにあまりある。

スーホがした、白馬の遺体を使って楽器を作るという決断は、これと同じ質のものであるろう。

この作品は、「所有の愛」から、個の尊厳を認め手放す愛への昇華を主題としていると考える。小学校二年生の教材として難しいテーマかもしれないが、たとえば、「あいしているから」¹²⁾において、「だってあいしているんだもん。」という言葉が「所有の愛」から「手放す愛」へと変容する例をみても、幼くても理解可能なのではないと思われる。この作品を読むにあたっては、その点を十分理解した上で取り扱わなければならないのではないだろうか。

引用・参考文献

- 1) 『こくご二年下 赤とんぼ』（平成11年文部省検定済）光村図書出版社（2000）
- 2) 賈芝，孫劍冰編：『中国民間故事選第1集』，人民文学出版社（1959）
- 3) 大塚勇三やく，赤羽末吉え：『スーホのしろいうま（月刊絵本こどものとも67）』，福音館書店（1961）
- 4) 大塚勇三再話，赤羽末吉画：『スーホの白い馬：モンゴル民話』，福音館書店（1967）
- 5) 『小学校国語 学習指導書 2 赤とんぼ』，光村図書出版社，p.91（2000）
- 6) 『小学校国語 学習指導書 2 年用』，光村図書出版社，p.374（1975）
- 7) 『小学校国語 学習指導書 2 赤とんぼ』，光村図書出版社，p.87（2000）
- 8) 呉羽 長：「「スーホの白い馬」の教材論的考察」，『富山大学教育実践研究指導センター紀要』，6，pp.67-78（1990）
- 9) 神宮輝夫：「作品に寄せて スーホの白い馬」，注7の『小学校国語 学習指導書 2 赤とんぼ』光村図書出版社，p.92（2000）
- 10) 佐野洋子：『100万回生きたねこ』，講談社（1980）
- 11) 「誰かになって生きて、両親「息子、希望残した」幼児脳死判定【大阪】」，『朝日新聞朝刊』社会面（2012.6.15）
- 12) マージョリー・ニューマン文，久山太市訳：『あいしているから』，評論社（2003）

本稿をなすにあたり川端建治先生からご懇切なるご教示をいただいた。ここに記して感謝の意を表します。

A Reconsideration of the Main Theme of “Suho no Shiroi-Uma,” a Japanese Reading Material for Elementary School Students

MIYAGAWA Hisami

Abstract

This has traditionally been interpreted as a story that describes Suho's deeper and pure love to, and “the changeless bond,” with his white horse. However, in this paper, I considered that it describes Suho's changing love to his white horse through his two decisions. The first decision was that he competed in the race riding his white horse. It means comparing his white horse and others, that is, showing off his vaunted horse, which resulted in losing his horse. The second decision was made when his horse, which had come back to him, seriously wounded and died, appeared in his dream and told him to make a musical instrument using its body. In response to the love of the white horse that tries to comfort Suho literally devoting its body, Suho's love to his horse sublimates into the one that is equal with each other and admits the other's dignity, from the love that is given to one's possession. At last, a musical instrument “Matouqin,” which is made of the body of the horse, not only comforted Suho alone, but also moved listeners' hearts, and spread all over the vast field in Mongol, letting many pastors forget their tiredness of the day.

Key Words : Primary school, Japanese Textbook, Matouqin, Mongolian bowed stringed instrument